

パルミラの諸街道とその景観構成

The roads from Palmyra
and The composition of their landscape

杉原 美智久

Michihisa Sugihara

I はじめに

周りに城壁をめぐらす一般的なギリシア・ローマ期の都市遺跡は、城壁によって内部と外部を機能的に分割することができる。城壁の内部とは、戦争などの危急時に長期的な籠城に耐え得るだけの十分な設備を有する空間であり、この中だけで日常生活の最低限をまかなうことができる空間をさす。対して外部とは、常に外界の脅威にさらされる危険地帯といえる。この危険地帯は死者の遺体を埋葬する墓域としても使用されることが多く、総じてこの地域を生者の街に対する死者の街、「ネクロポリス」とよんでいる。

ギリシアの著述家Plutarchの『Life of Romulus』¹⁾によれば、「都市」の創建建設にあたっては、まず事前の儀礼として築くべき「都市」の外周線に沿って、地面に犂溝をつくることから始まる。この作業によって都市の境界線は明確化し、城壁はこの溝線にほぼ一致する結果となる。

この犂溝儀礼で特筆すべきことに、都市設計上、門に該当する地点で一旦犂を上げて土を掘り起こさずに放置するという事実がある。当時の創建者または創建に携わる人々は、儀礼的な吉方に城門を設置することよりも、まず、「都市」に連絡する既存の街道、または新規の街道に接続しやすい位置に城門を設置することに重きをおいている²⁾。こうした必然的・意図的に設置された城門の外辺にあって、「都市」に直結した街道沿いに建造されることの多かった当時の墓は、創建当初からその墓域となる場所が決定されていたともいえるのである。

人が長年生活を営むとき、その最終的な結末である死という現実と直面する。死者の処理という問題は、「都市」として機能する以上、死体の衛生管理面ばかりでなく、墓地の土地管理面からもさけることの出来ない課題の一つである。死体処理の場ともいえる城壁外の墓域は、我々が考える以上に一般生活と密着した非常に近い関係にあるのであり、人の意識下

においても両者は遠く隔たることはない。

立地的には異なる城壁の内と外ではあるが、両者は日常生活の中で共に深く関与し、それぞれが全く単独に存在することは決してありえない。

「都市」とは本来、市民が恒常的に生活を営むに十分な場所をさすのであって、城壁の内や外といった立地的な差異に左右されることはない。本稿では、立地上、ともすれば個別化されることの多い城壁の内外を一つの有機的につながり持つ生活機能集合体と捉え、便宜的に城壁内の空間を内区、城壁の外を外区とし、両者を統合した総合空間をもって「都市」とする。

パルミラにおいては、外区に墓を形成するという当時一般的であった都市創建の法は成り立たない。表面的には内区にも墓の存在が認められるためである。これは創建以後のパルミラ新都市開発による設計変更、または移転によるためという見方が一般的である。

1. パルミラの概略

パルミラ (Palmyra) は、紀元前1世紀頃から紀元3世紀頃までに旺盛を極めたオアシス都市である。ローマ帝国とパルティア (アルサケス朝) 帝国との間であって、一時期ローマの属州となることはあったが、基本的には中立的な立場をもって商業をおこなっている。地中海世界とメソポタミア世界とを直接結ぶ重要な交通の要衝として栄えたパルミラは、機能面からも都市としての設備面からも隊商都市³⁾と呼ばれるに十分な都市であった (図1・2)。現在のパルミラ遺跡はシリア=アラブ共和国の大部分を占めるシリア砂漠の中心にあって、西方の首都ダマスカスと東方のユーフラテス河沿いにあるデリゾールを結ぶシリア砂漠横断道路の休息地点として栄えている。

現存するパルミラ遺跡の城壁は、内区の西方にあたる通称「墓の谷地区」と呼ばれる墓域と内区の西南にあたる「西南地区」⁴⁾に一部認められ

る最外郭の城壁、これとは別に、ベル神殿や列柱道路、劇場、アゴラと呼ばれる取引所などパルミラ遺跡の主要な建造物を取り囲む独立する城壁、別名「ゼノビアの城壁」と名付けられた城壁があり、パルミラはこの二つの城壁からなるといわれてきた(図2)。

従前、パルミラ最外郭の城壁は、西南地区以外の墓域をすべて取り込むものと推定されている。西南地区だけがパルミラ都市の最外郭として城壁に取り囲まれない理由は、パルミラ都市の移転という時間的な経過によって説明することが可能である。

パルミラ旧都市の存在は、「ゼノビアの城壁」内部の建造物が列柱道路に刻まれた顕彰碑文も含めて二世紀以前のものをほとんど含まないこと、「城壁」北部に塔墓と神殿墓が取り込まれていることなどから、「城壁」の南方、涸河(ワージ)を隔てた現在イスラム教徒の墓地を含む広大なガーデン地帯に旧内区を想定している。この仮説によるならば、西南地区の城壁は旧都市の内区と外区の境界線として存在していたこととなり⁹⁾、内区移転後も、継続して墓域を維持していたと考えられる。

2. パルミラの墓

パルミラでは紀元前からローマ帝国によって壊滅される西暦273年までの間、幾多の墓が建造されている。

墓は大きく個人墓と集団墓に分類することができる。

個人墓は、石灰岩の板石を組み合わせた箱式石棺の中に死者を直接埋葬する方法と、素焼きの陶棺に埋葬する方法があり、時には墓の上部に板碑を建てることもあるといわれる⁹⁾。個人墓は現在のパルミラ博物館付近に集中して発見された以外、類例に乏しく、その性格は十分把握されていない。さらに当時の街道との関連も不明な点が多いことから、本稿では個人墓には触れないまま以下の集団墓についてのみ言及をおこないたい。

集団墓には塔墓・神殿墓・地下墓の三様式(図3)が認められている。

塔墓と神殿墓は地上に建造される地上墓である。塔墓は数階に分かれ、これに属する墓のなかには数百体もの死者を同時に埋葬管理することが可能なものもある。神殿墓は四方に柱をめぐる中庭を持つものが一般的である。半地下式二階建てのものや入口の前面に柱が並ぶものなどが認められている。

地下を掘って建造される地下墓は、地上の建造施設を伴わないことから、地上からの認識はほぼ不可能である。地下内部は「地下宮殿」と称されるように、加工装飾された石灰岩製の化粧石を壁の全面に張り付けたものや、ギリシヤ神話に起因するフレスコ壁画などを施す例などがある。

こうした塔墓・神殿墓・地下墓の数は1994年現在、新規に発見されたものも含め351基であった⁷⁾。しかし崩壊著しく判別不可能な墓や埋没した墓、痕跡も残さず完全に崩壊したものもあることから、実際に建造された正確な数は依然不明のままである。

パルミラにおけるこれまでの研究成果から、ひとつの墓に埋葬される被葬者達は、原則として一部の奴隷階級を含む血縁的なつながりをもった家族、または一族によって構成されていることが判明している⁸⁾。しかし異なる墓同士の血縁関係については不明瞭な点が多い。日本隊が発掘調査を進めている東南地区の地下墓群C号墓とF号墓の例を挙げるならば、平面図ではC号墓の主室奥壁の数m頭上をF号墓の入口階段がすりぬけるほど両墓は隣接し、建造碑文の年代もC号墓が109年、F号墓が128年と数世代分の年数しか離れていない。それにもかかわらず、互いの系譜には一致する個所が全く認められなかった⁹⁾。

3. 本稿の目的

本稿が問題とする街道とは、城壁の外、墓地から成る部分、すなわち外区の街道のみに限定している。これは城壁外の街道を石などで舗装することがなかったパルミラでは、墓地のある外区以外での街道を復元する手立

てがないためである。したがって本稿の目的は、まず墓の配列や状態、その立地などから外区全体の街道を復元し、次にこうしたデータをもとにしてパルミラにおける街道の構造とその性格を、景観面から明らかにしようとするものである。ただし、今回は街道の景観に焦点をおいているため、墓建造の年代には特別に触れていない。これはパルミラ人が求める最終的な街道景観のあり方を明確にしようとする意図によるものである。

II パルミラの街道復元

本章では、まずパルミラを含む周辺地理をもとにした、広い視野から隊商交通の復元をおこない、これまでの街道研究の成果と私的な現地調査のもとづく独自の見解を踏まえて、街道の復元を試みる。

1. 周辺地理にみる隊商交通の復元

パルミラはシリア＝アラブ共和国の大部分を占めるシリア砂漠の北辺に位置する。ここは立地的にみれば地中海とメソポタミアの両地域を最短距離で結ぶ最適な地点といえる。地理的にはパルミラ西南のダマスカスから北東のユーフラテス河のハラビエまで続く、全長約380km、比高差約500mの丘陵地帯が途中途切れる地点にあって、パルミラはその丘陵の南斜面と砂漠とが接する所に位置する。

砂漠を横断する隊商（キャラバン）は、補給地点の少ない不毛な砂漠を無作為に目的地へと進むのではなく、一定の定まった経路に沿って移動する。これは砂漠にあって方位や行き先を見失うことは直ちに死を意味することになるからである。

シリア砂漠の場合、パルミラを経由するルート以外にも砂漠を直接横断する南方ルートがあったようであるが、そのルートは目立った目標物もなく水の補給地に乏しい過酷なルートであった¹⁰⁾。これに対してパルミラ

經由のルートは丘陵地帯の斜面に沿って交通が行われるので、補給地点が多く点在し、道を見失うことも少ないという理想的なルートであったと考えられる（図1）。

パルミラを起点として各ルートを推定すると、それぞれのルートが通る地理的環境から、丘陵地帯を利用するルートと砂漠地帯のルートの二つのルートに大別することができる。

丘陵地帯を基盤とするルートはダマスカス方面ルートとハラビエ方面ルート、エメッサ（現ホムス）方面ルート、ハレップ（現アレppo）へ直接抜けることができるシリアナ（現イスリア）方面ルートの四方面のルートを想定することができる。この内、シリアナ方面ルートだけが直接丘陵地帯を縦断するルートである。この山岳ルートはあまり重要視されることはなかったが、この地域にはパルミラと同時期の多数の遺跡とともに、宮殿跡と称される遺跡が発見されているため、単なる遺跡の点在地帯ではないことは確かなことである¹¹⁾。

これとは別に比較的平坦な砂漠地帯を直接横断するルートにドゥラ＝ユーロポス方面ルートがある。このルートは目標物の希薄なシリア砂漠を直接横断するルートで、直接ユーフラテス河に面するドゥラ＝ユーロポスに至るルートである¹²⁾。

またハラビエ方面ルートの途中でスゥーラ方面に分岐するスゥーラ方面ルート（のちのディオクレティアヌス道）もこのルートに属するとみてよいであろう。

2. 街道復元の研究

街道の復元にとって墓は最も有益な資料なのであり、様々な問題を我々に提示する。パルミラの三大様式ともいえる塔墓・神殿墓・地下墓は、個々の建造年代を碑文から検証したところ、図4のように様式ごとの時代的変遷が確認された¹³⁾。特に塔墓から神殿墓への建築様式の移行は顕著

にあらわれている。

建造碑文からみる第一の段階は、パルミラ都市創建より続く塔墓様式のみで西暦70年代まで続く。例外的に現在のパールシャミン神殿の裏にある半地下式の地下墓(L)を建造することはあったものの、基本的には塔墓という様式のみであった。地下墓が本格的に導入された第二の段階である80年代からは、塔墓と地下墓の二つの様式が平行して建造される。この組み合わせは130年代まで継続し変化することはなかった。

第三の段階である140年代を境にして、これまでの塔墓と地下墓という構図が崩れ始める。それまでの塔墓から一転してパルミラにとって新規に導入された神殿墓様式が積極的に採用されることとなった。ここに神殿墓と地下墓という新しい構図が成立し、この両様式はパルミラの滅亡まで続いた。

3. Gawlikowskiによる街道復元

Gawlikowskiは特に塔墓の内部構造に注目し、構造の変化を建造年代の差と捉え、街道の時代的変遷を明らかにした¹⁴⁾。

氏が具体的に図化した街道の変遷は、墓の谷地区と北地区西部についてのみであり、西南地区については街道の存在を指摘するに留まっている(図5)。

その街道復元方法は墓の出入口部分に着目するもので、向かい合い対峙する墓や、軒先を揃えるように一列に配する墓群の存在から、これらを「街道に接するよう意図して配置された墓」と捉え、こうした幾つかの街道の断片を繋げることによって、街道全体の流れを復元しようとするものであった。

4. 街道復元の再検討

パルミラの街道は、碑文研究の成果によれば、西暦140年代におこる地

上建造物間の大規模な世代交代である、塔墓から神殿墓への転換に一大画期をみいだすことができる¹⁵⁾。一部を除く大多数の塔墓は、山頂や山の中腹といった街道とはやや距離をおいて建造されるのに対し、神殿墓は平地にあって街道に直接接するように建造される。こうした各様式本来の特徴からすれば、神殿墓導入時期頃を境にして本格的な街道が整備されたといえよう。すなわち、パルミラの街道はそれまでの塔墓を中心とする比較的自由な幅をもった街道から一転して、強い強制力をもって市街地まで誘導する神殿墓中心の街道へと変貌するのである。Gawlikowskiが著した街道の変遷もまた、上記と同様な傾向を示すものであった。

街道を復元するにあたりGawlikowskiは、常に墓の出入口正面を街道に面するようにし、原則的には墓の裏側に街道を通すことはない。この法則をもとにGawlikowskiが復元する地区も含め、復元がおこなわれなかった北地区東部と東南地区について、現地調査の最新成果をもとに再度復元を試みる。

現地調査は、奈良・シルクロード文化事業財団の主催するシリア・パルミラ遺跡発掘調査団（団長樋口隆康）の発掘調査¹⁶⁾に参加した際に、その余暇を利用しておこなった。その主要目的はWiegandが集成する¹⁷⁾墓の位置とその出入口の方位（入口方位）の確認にあった。

図2・6・7はその現地調査のデータをもとに、再度街道の復元をおこなったものである。

墓の谷地区

Gawlikowskiはこの地域に墓が建造され始めた紀元前頃、谷の南側だけに街道の存在を想定していた（図5）。この街道は谷の北側を通る新たな街道の発生に伴って2世紀以降消滅すると説かれる。しかしこの街道の存在については積極的に賛成することができない。氏は墓群から南に離れて位置する塔墓No.16と、谷の東端に位置する塔墓No.53の二基を結ぶ街道の存在を想定している。しかしNo.16は結局最後まで周辺に墓が営まれること

なく単独の1基のみであった。Gawlikowskiが考えるように、街道の整備が整う西暦140年頃を待たずしてこの街道が消滅したとする見方も可能ではあるが、実はこの墓の存在理由は全く別のところにあるのではないかと思われる。

パルミラで墓を建造する建築家達は、常にある一つのことを念頭に捉えている。それはあらゆるものの影である。彼らは墓の建造場所を選定する際に、特に日の出によって生ずる山の影に細心の注意をはらい、影となる地域をさけ、常に太陽の光に満たされる地域をえらんで墓域としている¹⁸⁾。塔墓No.16の地点は東から延びる山影の北限にあたり、墓域の最南端の境界線上に相当する地に位置している。

また塔墓No.53は、その内部構造からすれば塔墓初期の段階に位置づけられてはいるものの、塔墓としては極端に小規模であり、加えて内部の埋葬施設に簡略化がみられることなどの点から、初期段階の建造物とは考えにくい。こうした諸点をふまえるならば両墓をつなぐ街道の存在を全面的に否定することはできないものの、確実に存在する街道であるとは言い切れないということになる。

西南地区

西南地点の街道はGawlikowskiと全く同じであった。(図7左)

北地区

北地区西部にある神殿墓群の街道について、Gawlikowskiは幾度も交差する街道を想定している(図5)。今回の調査から神殿墓列の入り口は、氏と同様基本的に南東方向に開口することで一致した(図6下)。しかし本来の街道が交差するのか一直線に北上するものなのか結論をだすことはできない。本稿では比較のために、便宜上後者を掲載した。

このほか、氏が復元を試みなかった中央部と東部とに合わせて二つの街道Nos. 130・131・132・132a・132bとNos. 113・114・115・116・117…の存在を確認している。街道Nos. 130・131・132・132a・132bはパルミラ都市の移転に

よって、城壁内に取り込まれてしまった旧街道であろう。墓№.86・129d・130・131・132・132a・173dなどと同様、旧パルミラ都市を復元する上で有効な資料となるものである。

北地区と次項で述べる東南地区は、パルミラの中でも特に墓が広範囲に分布する地域である。したがって街道復元に必要な総合的な情報が希薄となるため、復元作業も一層の慎重を要する。北地区西部に復元された街道の行方を、Gawlikowskiは墓が建造されない帯状の空白地帯に求めている。これはこの空白地帯北側に点在する東西方向に延びる帯状の墓からは、正確な街道の復元が非常に困難であったためであり、今回の復元でも街道を見いだすことはできなかった。

東南地区

この地区はGawlikowskiが全く復元をおこなわなかった地域である。この地域も北地区同様広範囲に墓が点在する。この中で一ヶ所だけ墓群 Nos. 180・181・182・184・203・204から成る街道の一部を確認することができた(図7右)。

Ⅲ 街道の景観

ローマ法の基礎になったといわれる「十二表法」には他人の土地に人を埋葬することを禁止する条文がある¹⁹⁾。これは墓地が個人または一族の所有する私有地であることを示唆するもので、その所有者が特別に認めない限り他人がこの地に死者を埋葬することはできない。この法律そのものがローマと同様にパルミラでも機能していたとは断定できないが、ローマを含む地中海世界、およびメソポタミア世界まで広がる広大なヘレニズム文化圏に共通する精神文化の中に、明確に明文化されないまでも、これに近い思惟が息づいていた可能性は否定できない。

パルミラにおいて、墓域が個人や一族によってどのように分割され、ど

のように管理されているのか、正確に判断できる資料はこれまで発見されていない。また街道が公道なのか私道なのかという問題も残されている。少なくとも墓の谷地区を見る限りにおいて、街道は長年の蓄積によって整備されていることに間違いはなく、個人や一族の枠組みを越えて街道が整備されていたと考えられる。しかしパルミラでは、長年の蓄積が街道の整備だけに留まらず、街道の景観にまで発展した。

1. 街道景観の二重構造

街道の舗装をおこなわなかったパルミラでは、塔墓や神殿墓といった地下墓をのぞく地上建造物によってのみ街道の復元が可能となる。これらの建造物は現存する建造形態から「単独」と「並列」の二つに分類することができる²⁰⁾。

単独で建造する墓は、山頂や城門といった主要な地点にしか建造されない塔墓である。山頂の塔墓Nos. 2・4・5・24・25・26・27は直接街道と関連するのではなく、遠方からパルミラの位置確認をおこなうために重要な景物となっている。城門に取り込まれる形で建造された塔墓No.83cは、現状から内区と外区との境界線に位置する街道沿いの墓であるといえる。この墓はNos. 83・173などと同様城壁に取り込まれた墓で、都市創建の初期段階から城壁の一部として計画されたのではなく、都市の移転または拡大に伴う都市計画の変更によって結果的に取り込まれてしまったようである。

またこの他の墓に塔墓No.16や塔墓Nos. 12・29・32などのような墓域の範囲を表すもの²¹⁾や、ガーデン付近のNo.Z10²²⁾やパールシャミン神殿裏のNo.Lのように周辺に建造物が全くない地点に単独で建造されたものなど、現段階では性格が不明な墓も多い。

並列する墓は塔墓だけの列と神殿墓だけの列がある。第Ⅱ章第2節でも述べたように、塔墓と神殿墓との建造時期には明かな年代の差があり、まず街道は北地区中央部の街道Nos. 130・131・132・132a・132bのような、街道

としての十分な間隔をもってゆとりのある街道を整備することから始まる。

墓の谷地区東部の街道は、南北に山を配しそれぞれの山の斜面を利用した塔墓列から、平地の神殿墓列へとその移行が顕著である。まず街道は尾根伝いと山肌に建造された塔墓列、街道北側の塔墓列 Nos. 39a・39c・39d・41・42・44・45・46と南側の塔墓列 Nos. 62・63・64・65・67・68とが合い対峙することによってその景観が形成される。その後の神殿墓の導入に伴い、神殿墓列 Nos. 43・43a・73a・73c・75などによる明確な街道が平地に整備されるに至った²³⁾。

このように街道は、街道に対する遠くの塔墓と近くの神殿墓という、広がりを持った空間的奥行きをもつ、新たな景観を結果的に得ることとなったのである。遠景と近景の二つの風景を持つ街道の景観は、これまで以上に墓域の空間を際立たせるだけでなく、街道のあり方にまでも強い影響を与えることとなる。墓のおりなす遠と近、これがすなわち「街道景観の二重構造」である。

街道景観の二重構造は、上記のような山の斜面のみならず平地でも全く異なる手法を用いて表現される。平地での街道空間の広がり、遠景においては墓を並列し、近景においては三角形に建造することによって得ることができた。

並列形態は塔墓Nos. 159・160・161・162や神殿墓Nos. 186・187・188・188aがある。神殿墓は街道に接するように建造されるのが一般的である。しかし神殿墓列Nos. 186・187・188・188aだけは周辺から突出した高所に特別に建造され、街道に接するというよりは北地区西部の塔墓列Nos. 159・160・161・162同様、より遠方から望まれることを意図して墓域の広がりを際立たせるように建造されたと考えるのが自然である。

この他、上記と同じ目的をもつものに、墓の谷地区の東傾斜面に建造された塔墓列Nos. 69・70・71・71a・71b・71cがある。この墓列は北地区から入都する際に目視出来るだけでなく、パルミラの顔として、内区景観の重要な

一部となっている。

三つの塔墓を基本とする三角形が街道に接するように建造される墓は、西南地区の塔墓群Nos. 100・102・103と、北地区のNos. 121・122・123・124、東南地区のNos. 181・201・202・180である。この三角形は、単に街道の奥行きを表現するだけでなく、単調な街道景観、最後のアクセントとして各街道のより内区に近い個所に建造されている²⁴⁾。

2. 墓とベル神殿

街道を渡る隊商は、高さ二十数mに達する塔墓や正面装飾に優れた神殿墓を眺めながらパルミラの内区へと導かれ、また墓に見送られてつぎの目的地へと出発する。しかしパルミラの街道はこうした墓のおりなす街道景観に加え、異なる属性をもつ巨大建築物が認められる。それはパルミラ最大級の規模と高さを誇る建築物、ベル神殿の存在である。

ベル神殿は西暦32年4月に大規模な再建が行われている。この時期までには旧ベル神殿が土台とする人工丘の上に、新たな基台を基礎とした新ベル神殿が建立されたといわれている²⁵⁾。

新ベル神殿が建立される紀元1世紀は、神殿墓様式が確立する以前にあって、塔墓による街道の大枠が定義されつつある時期にあたる。いわば今後の街道のあり方を定義する重要な時期に、ベル神殿はそれまでの旧神殿から面目を一新し、周辺地形よりもさらに高所な地点に建立されることとなったのである。こうした動きによって新ベル神殿はこれまで以上に内区はもとより、城壁の外である外区の街道からも容易に見通すことが可能な施設景観となった。ベル神殿は内区にありながら遠くに位置する街道の景観の一部として重要な地位を占めることとなるのである。(写真1・2)

街道の景観はベル神殿という堅固な背景を得ることにより、塔墓と神殿墓、そしてベル神殿という全く性格の異なる建造物を一つの景観のなかにはめ込むことに成功する。これはそれぞれが属する地域、墓に代表される

外区と神殿に代表される内区の融合を意味するものである。紀元1世紀より本格化する外区と内区の視覚的接近は、西暦140年代の神殿墓導入によってさらに加速し、街道を形成する墓群Nos. 36・38・38a・38bとベル神殿のような関係を生んだ。内区内にあって城壁に取り込まれた墓に見られる精神面の融合は、こうした積み重ねの延長上にあるのではないだろうか。

3. 街道の行程復元

今日の街道はより円滑な交通をおこなうため、様々な道路標識によって彩られている。日本国内では全く同じ標識に統一されているが、世界に目をむけると各国特有の種々様々な標識が存在する。隊商貿易をおこなうパルミラのように、異なった言語や人種、習慣を持つ人々が日々行き交う国際都市では、誰もが直感的に理解できる標識が必要である。パルミラにとっての交通標識、それはまさに墓そのものであった。

墓の谷地区

エメッサ方面から墓の谷地区を通してパルミラ内区に入都する場合、まずパルミラ北西に連なる丘陵地帯を、複雑に入り組んだ数々谷間の中からパルミラへと向かうただ一つの谷間を見つけ出すのが肝要である。こうした目的のために、この谷間入り口付近の山頂には、谷を隔てて対になるように塔墓No. 2とNos. 4・5が建造されている。さらに塔墓No. 6やNos. A・Bなどに誘導されながら谷の奥に進入すると、真っ先に塔墓Nos. 7・13・20などの比較的隣接する墓群が現れる。やや離れた地点に街道に沿って散在する塔墓Nos. 12・29・30・31・32・16は単に墓域の限界を示すだけでなく、三角形に並ぶ塔墓群Nos. 9b・14・15などのように単調になりがちな街道の景観と墓域全体に広がりとお興行きのアクセントを与える。こうした中、街道の最後に見えるベル神殿の荘厳な巨大建築は、数km離れているにもかかわらず実際の距離を見誤るほどに近く感じ、かつ雄々しい。

途中、歩き易い涸河(wadi)沿いの街道から小高い小山の上にある街

道を形成するNos. 36・38・38a・38bまで強引に登らせるのは、街道をより直線的に保持しようとするためではなく、小山からベル神殿を美しくかつ効果的に望ませるための演出である。この地点が墓の谷地区一番の「山場」であり「見せ場」であったといえる。

この後、小山から再び涸河に下りることによってベル神殿が見えなくなった街道は、そのまま涸河に沿って城門まで導かれる。

西南地区

ダマスカス方面から左手の丘陵伝いにパルミラ近辺までやってきた隊商は、周辺よりやや小高くなった台地状の地域に建造された墓群Nos. 87・90・90a・91などを発見する。ほぼ平坦と言って良いほどなだらかなこの東斜面一帯は、日の出に生じる山の影に左右されることなく墓を建造することができ、墓の谷地区のような建造地点の制約は基本的にない。地上建造物に限っていうならば、そのほとんどは街道に接する形で建造する。城門近くの塔墓群Nos. 100・102・103のような三角形に配する塔墓が街道景観に変化をもたらしている。

ベル神殿をやや高所から望むこの地区は、街道沿いに建造された墓の切れ目から神殿を直視することができ、眼前間近の墓と遠くのベル神殿が一体となって迫ってくる。ここでは墓域全体が街道の「山場」である。

北地区

ハラビエ方面からパルミラに延びる丘陵を右手に沿ってやってくる隊商は、途中で南下する別の流れと合流する。その後、パルミラを目指す彼らの視野に最初に映るのは山頂の塔墓Nos. 24・25・26・27である。さらにパルミラ近辺に近付くと、山の斜面中腹に建造された塔墓群Nos. 70・71・71a・71b・71cなどが見え、程なくして広大な北地区一帯に点在する墓が眼前に見えてくる。北地区には城壁によって閉ざされた街道と、唯一現存する街道の合計三本の街道が認められる。しかしここで重要となる街道は、Nos. 113・114・115・116・117などの南北に延びる墓群が示す街道である。No.

115aは六角形の基礎を持つ、これまでパルミラに見ることのなかった独特な墓様式である²⁶⁾。これがこれまでの墓様式以上に街道の入り口を限定するような指示性の高い建造物であるならば、隊商は北地区西方奥深くにまで進入することなく、一番近い北地区東端のこの街道に円滑に導かれるはずである。

街道Nos. 113・114・115・116・117…に導かれた隊商は、街道の遠方に並列する塔墓群Nos. 159・160・161・162とその中間に散在する幾つもの墓を一度に望むことができ、一方、墓が希薄な街道の南東には、墓の間から巨大なベル神殿を眺めることができた。さらに街道の後半には三角形に建並ぶ塔墓群Nos. 121・122・123・124が認められ、街道にアクセントを添える。間もなく神殿墓群Nos. 126・126a・126bによって街道幅が制限されるが、やや間隔の開くNo.126とNo.126bの間を抜けて城門へと続くのであろう。

この地区は起伏の乏しい平地にあるため、墓の谷地区や西南地区のようにベル神殿を優雅に彩る「山場」となるような地点はない。しかし、新ベル神殿がそれまでより数m以上も基礎を上げなければならなかった要因は、神殿より高所に位置する墓の谷地区や西南地区から望む景観のためだけではなく、むしろ、この北地区や次項に記する東南地区といった平地からの展望のためにこそその真価が発揮されるのである。平地にあるにもかかわらず他のどんな建造物よりも突出して高く巨大なベル神殿であること、このことこそがパルミラにおける街道景観の、または都市景観の一大イベントであった。

東南地区

この地域は北地区同様平地であるためか、広い地域一帯に墓が散在しており、正確な街道を把握することは難しい。さらにこの周辺には城壁および城門といった内・外区との境界を示す建造物が見あたらないため、墓域と内区とのかわり合いが一層不明瞭となっている。今回確認した街道である墓群Nos. 180・181・182…はその方角からして、ドゥラ＝ユーロポス方

面、またはボロゲシア方面からシリア砂漠を直接横断するルートの一端を担っていた可能性が高い。

砂漠の中であってなによりも一際映える、パルミラ周辺に生茂ったナツメヤシなど緑の樹木を目指してパルミラ近辺にやってくる隊商は、やや高所に建造する神殿墓群Nos. 186・187・188・188aを目印として墓域内部へとやってくる。また唯一判明している街道を含めて墓群Nos. 180・181・182・・・一帯も、平地である東南地区の中であって広い範囲に高まる小山の上に建造していることから、このそれ自体格好の目標物となって隊商を導いてくることが考えられる。しかしそれ以上にこの小山は、墓の谷地区のものと同様ベル神殿を効果的に望むための街道景観の「山場」として、最高の演出を狙ったものである。

IV まとめ

パルミラにとって街道景観のクライマックスは常にベル神殿とある。こうした演出は、それまでの装飾豊かな神殿墓や三角形に配する塔墓などからなる、墓の景観に最後の華を飾るものである。これは墓が属する外区とベル神殿が属する内区との融合を意味するだけでなく、本来、城壁の内と外で隔たれる二つの全く異なる属性を、一つの景観として容認することを可能とする、精神面での融合を示唆するものである。

隊商がここを訪れるとき、誰もがこの美しい景観に心を奪われる。シリア砂漠を渡りきったという到達感と安堵感。そして不毛な砂漠地帯から突然ひらかれる人工的な芸術建築の卓越した建築意匠、様々な色と匂い。これらのすべてが長旅の疲れと喉の乾きを一時満たす強烈な刺激となって、五感の隅々にまでに染み渡るのである。この景観を生みだしたパルミラの人々は、この一瞬の感動を得るために、パルミラ建築の代表として塔墓と神殿墓、そしてベル神殿のある街道景観を生みだしたのではないだろうか。

この景観は、パルミラ崩壊から遠く現在に至るまで変わらず我々の前に存在し、滅ぶことのない永久のメッセージを我々に投げかけているのである。

本稿は、平成6年度奈良大学大学院修士論文を展開したものである。本稿作成にあたり日頃より御指導いただいた樋口隆康、水野正好、泉拓良の各先生方に厚くお礼を申し上げます。また、現地では西藤清秀氏をはじめ多くの研究者から度重なる御世話と御教示を得た。さらに、なら・シルクロード博記念国際交流財団、シルクロード学研究センターからは様々な便宜をはかって頂いた。記して感謝の意を表します。

(文化財史科学専攻 博士後期課程 2年)

註

- 1) Plutarch, *Life of Romulus*. (Joseph Rykwert, *The Idea of A Town*, LONDON, 1976. 一部和訳 前川道郎・小野育雄訳『<まち>のアイデア』みすず書房1991.)
- 2) J. Rykwert(1)による。
- 3) Michael Rostovtzeff, *Caravan cities*, OXFORD, 1932.
(青柳正規訳『隊商都市』新潮社1978.)
- 4) 墓域は他に遺跡北方の「北地区」と東南方向の「東南地区」があり、計四つの地区が確認されている。
- 5) 北地区と東南地区の外に城壁をめぐるした痕跡は、今までのところ詳しい発表がおこなわれていない。パルミラ都市における最外郭の城壁は、墓の谷地区などのように部分的なものに留まっていた可能性も否定できない。
- 6) 小玉新次郎「隊商都市パルミラの研究」『東洋史研究叢刊四十八』同朋舎出版1994。同氏『パルミラ—隊商都市—』近藤出版社1980。同氏『隊商都市パルミラ』東京新聞出版局1985。
- 7) 杉原美智久「シリア・パルミラ遺跡の墓制」平成6年度奈良大学大学院修士論文。
- 8) 墓の谷地区のエラベールの塔墓 (Na13) は、墓内の埋葬碑文の集成をもととする一族の系譜が判明している (Chabot, *Choix d'inscriptions de palmyre*, PARIS, 1922. 小玉新次郎(6)の訳による) また、墓の部分的な売却

も碑文より確認されているが、売却相手との血縁関係およびその系譜は不明である。

- 9) *TOMB A AND C SOUTHEAST NECROPOLIS PALMYRA SYRIA*, PUBLICATION OF RESEARCH CENTER FOR SILK ROAD LOGY VOL.1, JAPAN, 1994. F号墓の建造年代は、シルクロード学術研究センターの御教示による。
- 10) 前嶋信次・加藤九祚『シルクロード事典（新装版）』芙蓉書房出版1993. Ross Burns, *MONUMENTS OF SYRIA*, LONDON, 1992. M.A. Madoun, *LE LIMES ROMAIN DANS LE DESERT SYRIE*, 1980. Hermann Schreiber, *Sinfoni Der Strasse*, 1960. (関楠生訳『道の文化史』岩波書店1962.)
- 11) Daniel Schlumberger, *LA PALMYRENE DU NORD - OVEST*, PARIS, 1951.
- 12) 小玉氏はドゥラ=ユーロポスよりさらにユーフラテス河下流にあるボロゲシアとの直接交通も想定している。(6)参照。
- 13) Schmidt Colinet, *Palmyrenische Grabarchitektur*, PALMYRA, LINZ, 1987.
- 14) M. Gawlikowski, *monuments funeraires de palmyre*, warszawa, 1970.
- 15) 西暦118年から143年にかけて、ラテン名を持つパルミラ市民が急増し、パルミラのローマ化が急速に進行する現象が認められるという(泉拓良「シリア・パルミラにおけるローマ化の問題」『文化財学論集』文化財学論集刊行会1994.)。時を同じくして塔墓から神殿墓へと転換する墓様式の大画期は、こうした新しい風潮のなかで開花し浸透したものであろう。
- 16) パルミラ遺跡東南地区の調査は、1990年の地中レーダー探査に始まる。1993年シルクロード学術研究センターの設置以後、センターの企画研究として実施継続され、1994年には東南地区A・C号墓の報告書が刊行された(9)。現在、F号墓の調査を継続中である。
- 17) Theodor Wiegand, *PALMYRA*, BERLIN, 1932.
- 18) (7)による。
- 19) 佐藤篤士「十二表法」『西洋法制史料選1』創文社1981.
- 20) (7)による。
- 21) 第II章第4節。
- 22) Gawlikowski, 1970年(14)には登録番号がなく位置だけが掲載されている。Z(ゼット)ナンバーは杉原修士論文で付けた登録番号をさす。

- 23) 一部の墓列に塔墓と神殿墓が混合する場合がある。こうした複合墓列が、同時期に成立するのか両墓に時期差が生ずるのかという問題は、今後の研究を待たねばならない。
- 24) 三角形に塔墓を密集させるものに、墓の谷地区の塔墓群Nos. 9b・14・15などがある。これらの墓は地下に塔墓とは独立した地下墓を持つ複合様式墓で、こうした塔墓が三角形に配される理由として、景観的な要素を含む可能性も否定できないものの、東方に隣接する地下墓群と同様、地下墓同士が接触しないための技術的なものであろう。
- 25) J.Cantineau, *Inventaire des inscriptions de Palmyre*, IX, BEY-ROUTH, 1933(小玉新次郎訳(6)による)
- 26) 詳細は未発表である。

summary

Palmyra was built in the middle of the syrian desert. Necropolis of Palmyra is separated to four area - A valley of tombs necropolis, South - west necropolis, North necropolis, South - east necropolis - . The road ran through many tombs in necropolis.

The roads landscape in necropolis makes Temple tomb(near distance), Tower tomb(middle distance) and The temple of BEL(extreme distance).

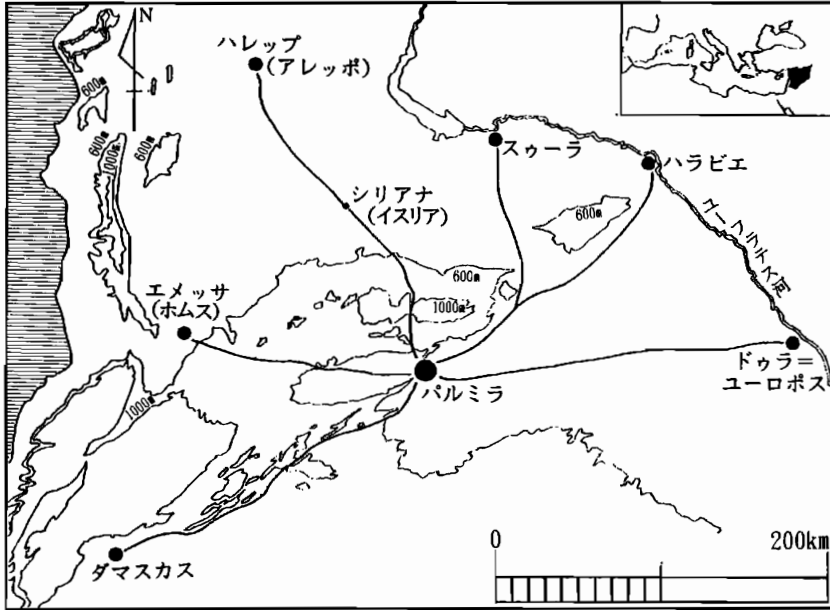


図1 パルミラ周辺の遺跡

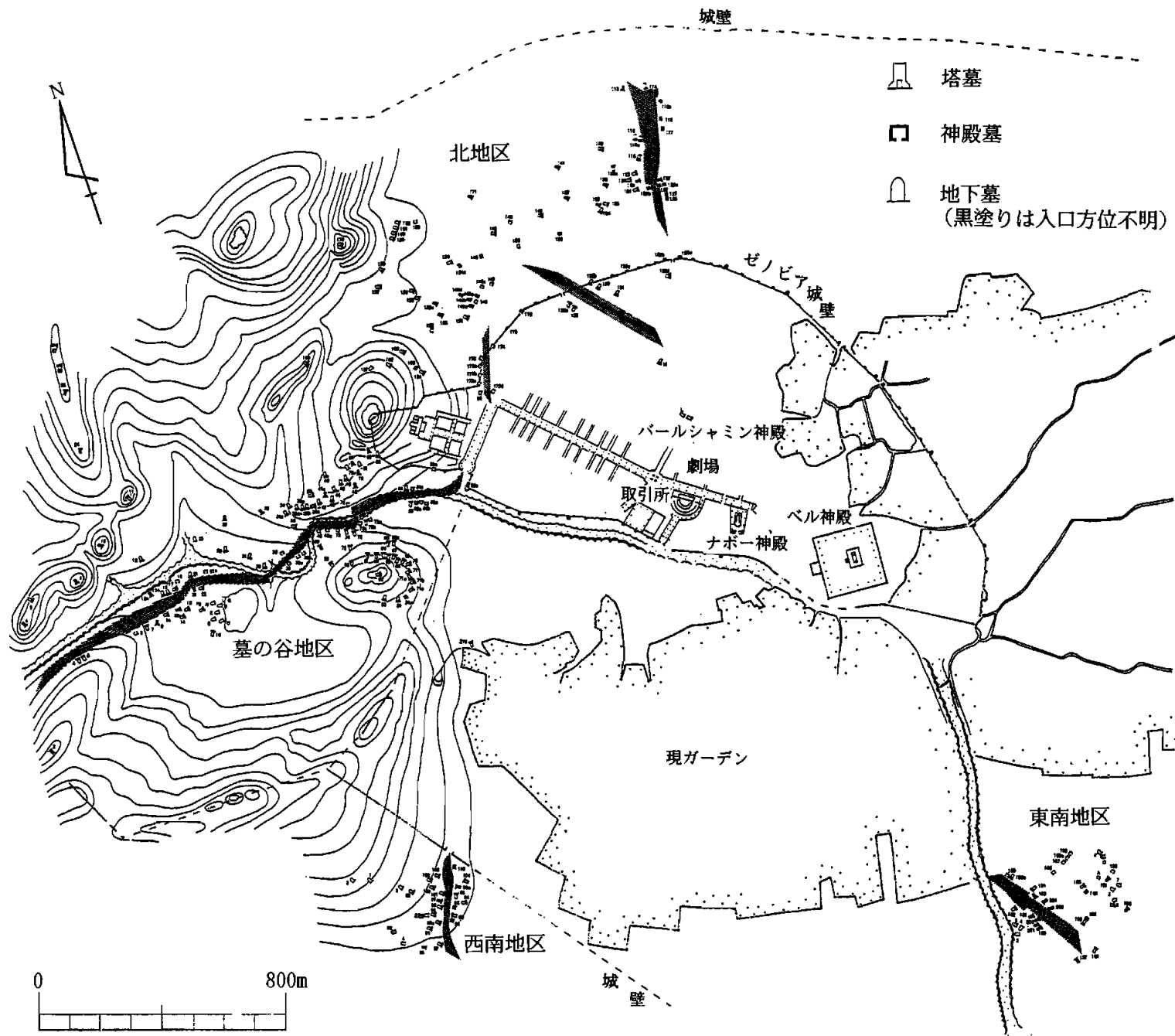


図2 パルミラ遺跡の概要 (斜線は街道を表す。)

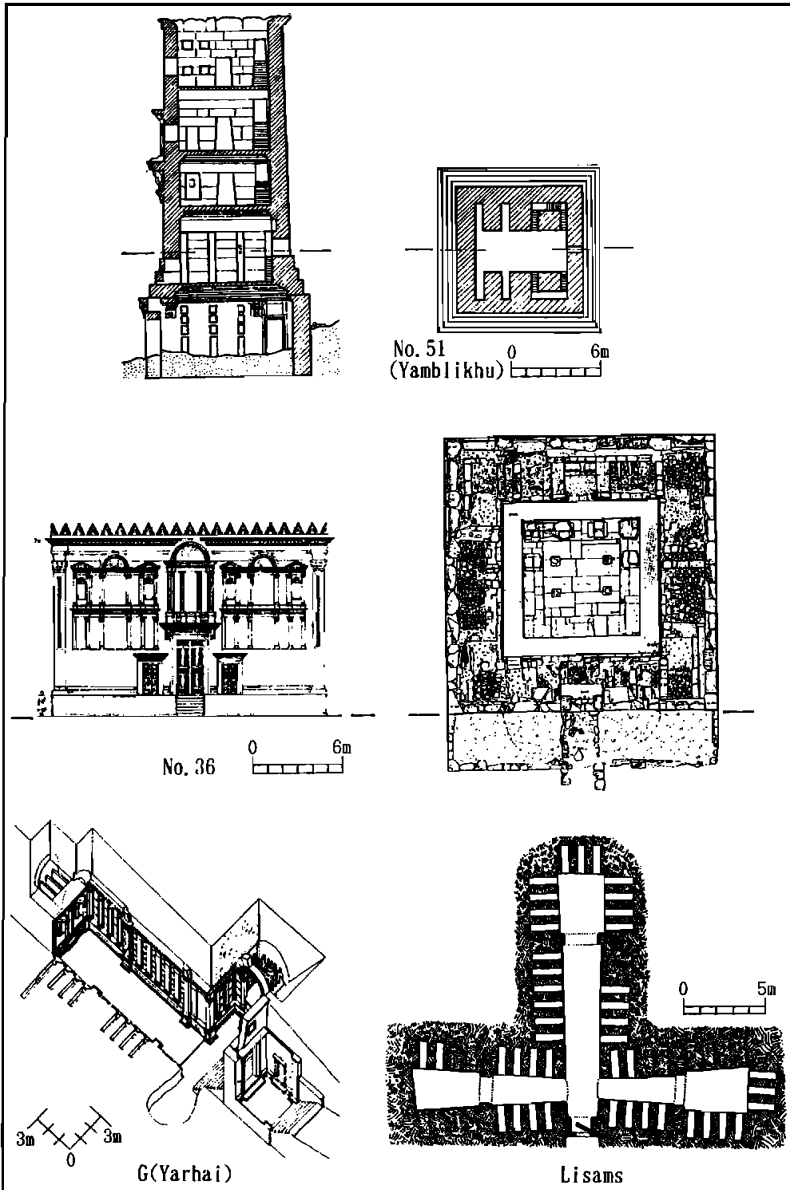


図3 パルミラの墓様式 (S.Colinet 1987より)
 (上: 塔墓 中: 神殿墓 下: 地下墓)

	塔 墓	神 殿 墓	地 下 墓
紀元前 1	9		
後 1	9		
10			
20			
30	33		
40	40		
50			
60			
70	73, 79		
80	80, 83, 83, 89		81, 87, 89
90			94, 98, 98
100	103		106, 108, 109
110	118		113, 114, 115, 116, 118
120	120, 128		123, 124
130			133, 138, 138, 138.
140		143, 149	142, 144
150		150, 159	
160			
170		171	179
180			186
190			193
200			
210		212	
220		225	
230		236	232, 239
240			
250		253	251
260			

図4 墓の建造年代 (S.Colinet 1987より)

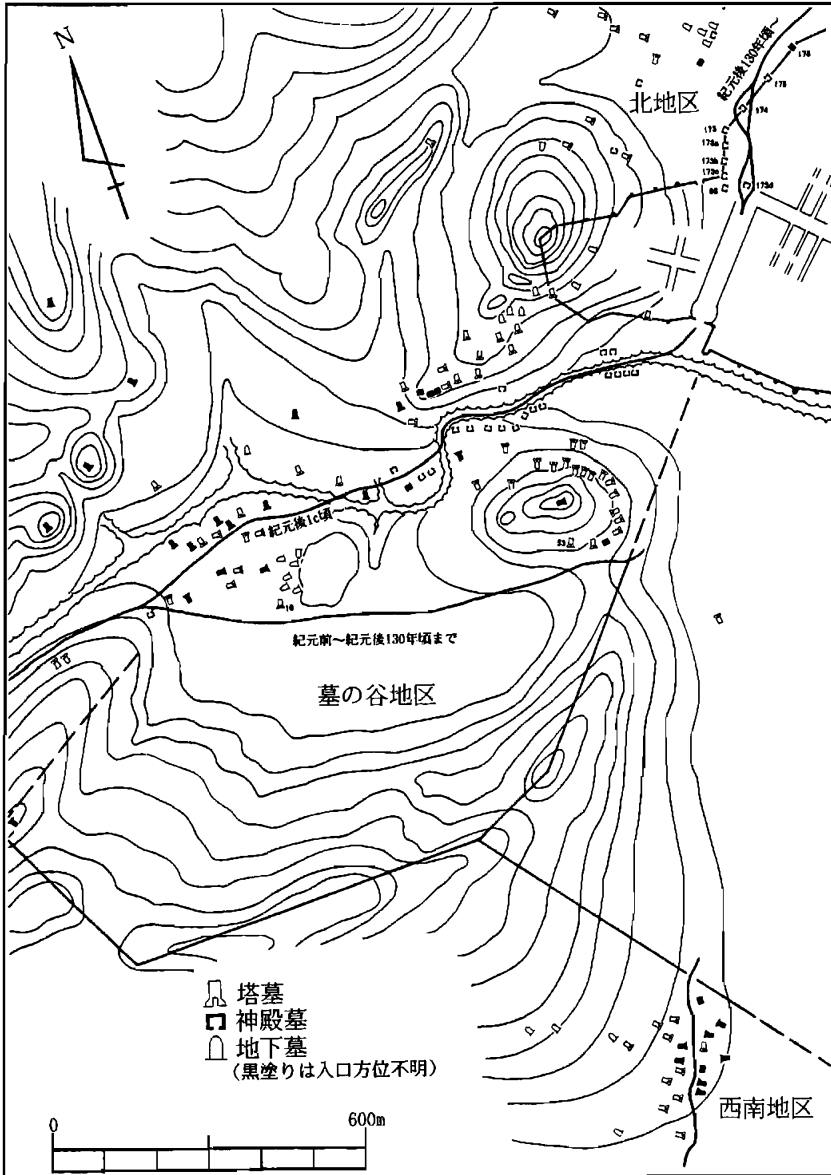


図5 Gawilkowskiの街道復元
 (1970年の図面を合成。城壁および墓は
 パルミラ終末段階に存在していたもの)

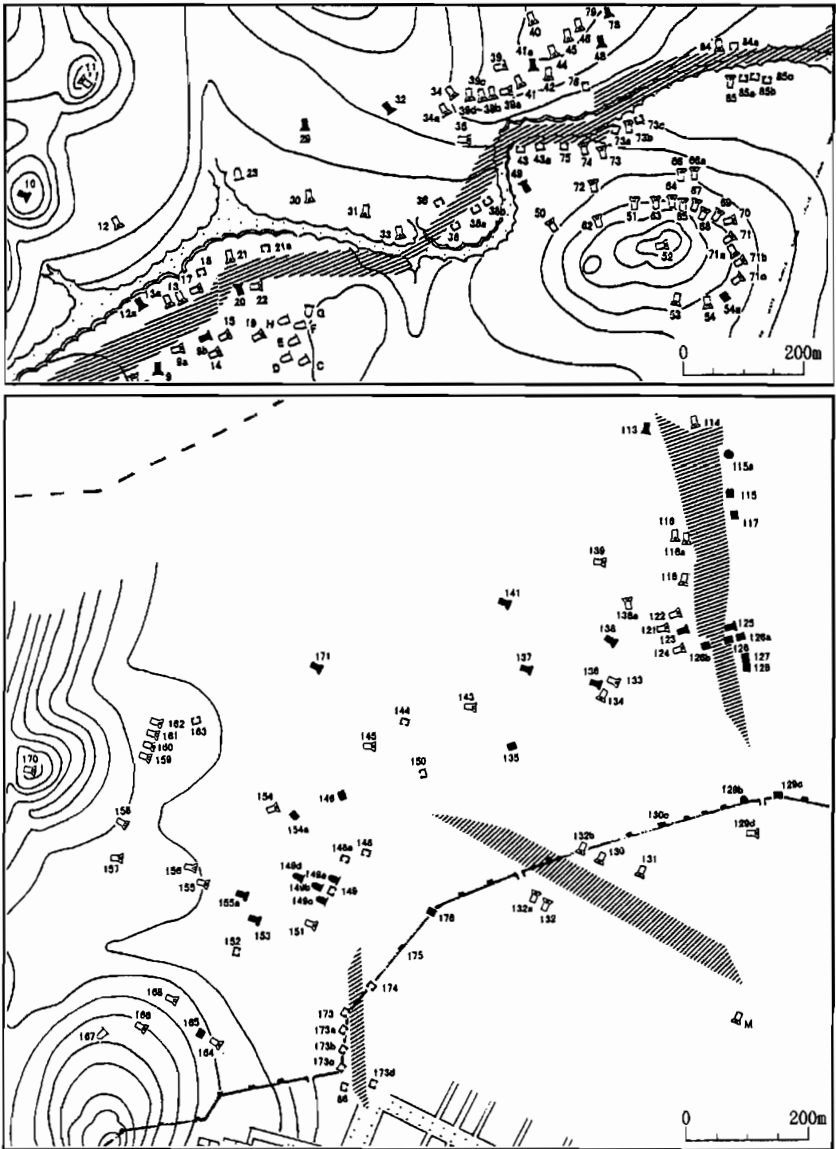


図6 街道復元
(上：墓の谷地区 下：北地区)

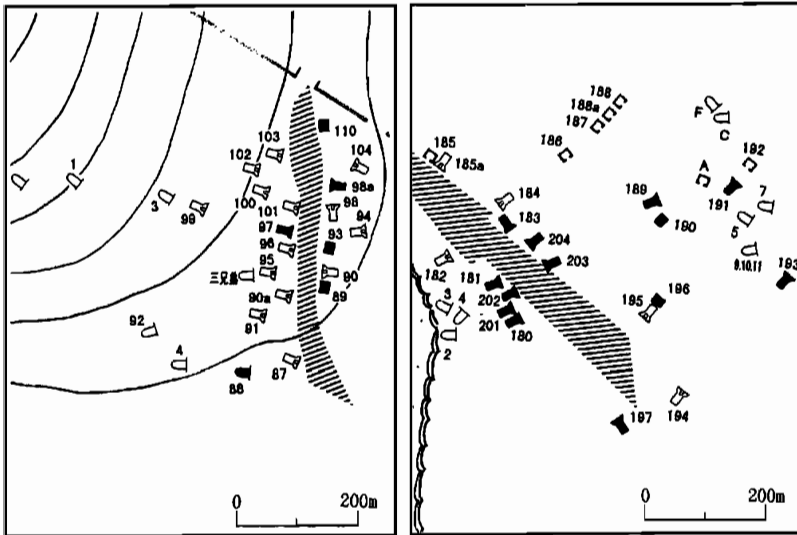
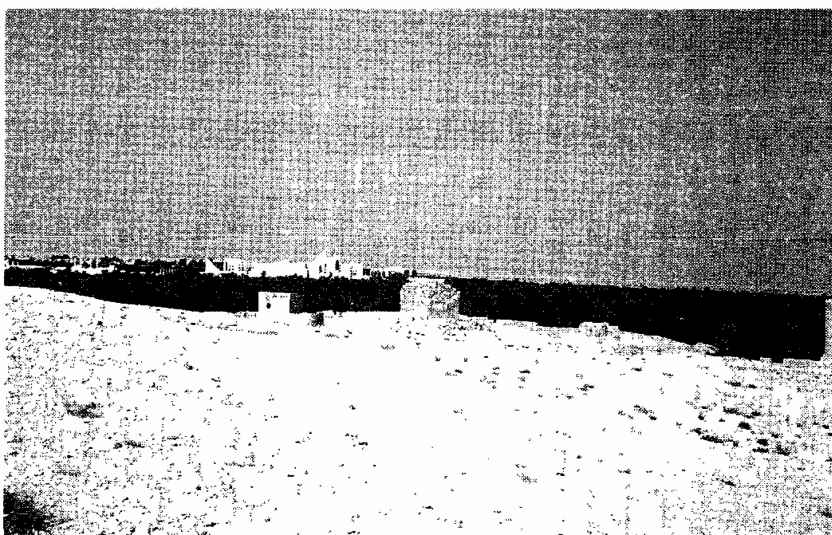
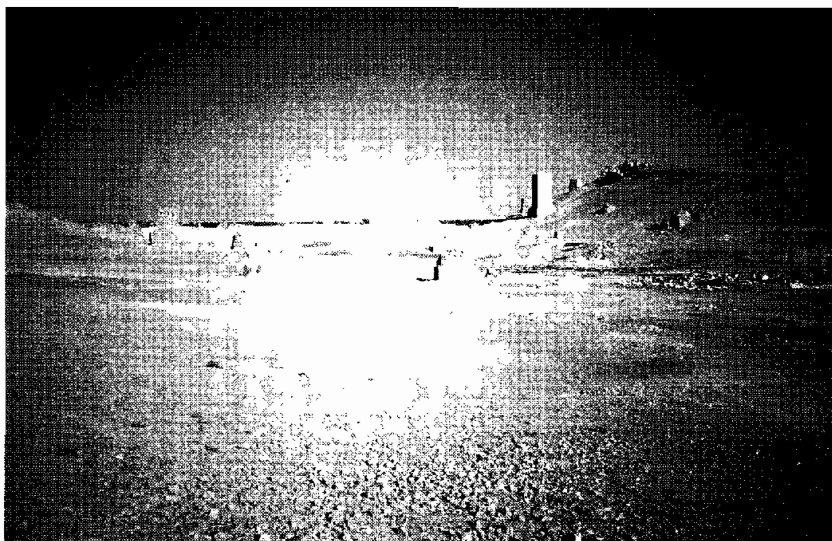


図7 街道復元
(左：西南地区 右：東南地区)



上：写真1 墓の谷地区とベル神殿-Na.36の北よりー
下：写真2 西南地区とベル神殿
(ともに画面中央奥はベル神殿)